

フーコーのパレーシア

相澤伸依

La *Parrèsia* chez Foucault

Nobuyo AIZAWA

Cet article porte sur la notion de *parrèsia*, courante en Grèce antique mais longtemps oubliée dans l'histoire de la philosophie. Elle fait cependant l'objet d'une vive attention depuis que Michel Foucault l'a développée dans ses derniers cours au Collège de France.

Nous avons deux objectifs. Premièrement, nous clarifions son projet philosophique des dernières années afin de comprendre pourquoi il s'intéressait tant à cette notion. Il est à noter dans cette perspective qu'en parlant de la *parrèsia* dans ses cours, Foucault mentionnait souvent le nom de Kant et son article "Qu'est-ce que les Lumières?", titre qu'il a repris lui-même pour son article. Dans ce dernier, Foucault situe son propre travail dans la lignée de la philosophie kantienne, donc critique, dont l'objectif consiste à critiquer l'aujourd'hui pour chercher la possibilité d'une autre vie. Se posent alors deux questions: quel mode de relation la philosophie doit-elle prendre à l'égard de l'actualité et comment pouvons-nous franchir la limite qui nous est imposée, et vivre autrement?

Deuxièmement, nous essayons de classer et d'examiner plusieurs sortes de *parrèsia* car cette notion a différents aspects. Nous trouvons les quatre catégories suivantes: la *parrèsia* démocratique, la *parrèsia* autocratique, la *parrèsia* socratique et la *parrèsia* cynique. Ce travail nous permettra de découvrir dans la *parrèsia* des réponses à nos deux questions.

Ainsi pouvons-nous conclure qu'aux yeux de Foucault la *parrèsia* est une des sources de la philosophie critique à laquelle il appartient lui-même. Nous pourrions trouver dans la pratique de la *parrèsia* quelques éléments critiques qui sont développés plus tard par Kant, et puis par Foucault.

はじめに

「パレーシア (*parrèsia*)」概念は、晩年のミシェル・フーコーが注目したことで知られている¹⁾。1976年に『知への意志』を刊行したフーコーは、その続編『快樂の使用』『自己への配慮』を死の直前の1984年に出版するまで沈黙していたとも言われるが、実際はこの「沈黙」期間も旺盛に執筆し、また講義をしていた。『知への意志』刊行後は「統治性 (*gouvernementalité*)」概念を提出し、77～9年の講義ではその歴史がたどられた。ところが、80年代に入ると、これまでは近現代を研究対象としていたにもかかわらず、扱う時代ははるか過去の古代ギリシャ・ローマ時代になり、問題関心もそれまでの権力から主体へと移行する。この延長線上にあるのが古代ギリシャ・ローマ時代の概念「パレーシア」を考察対象とする「自己と他者の統治」と題された二つの講義である。この講義でフーコーはパレーシア概念を多面的に捉え、その展開をたどっている。1997年以降、フーコーのコレージュ・ド・フランス講義録はほぼ年一冊ペースで刊行中であるが、2008年、2009年それぞれに1982-3年度「自己と他者の統治」と1984年「自己と他者の統治II：真理の勇氣」の講義録が刊行され²⁾、フーコーのパレーシアをめぐる思索をたどることが可能になった³⁾。これにより、なぜフーコーがパレーシア概念にかくも関心をよせたのかという疑問にも答える手がかりが得られたのである。

本論文の目的は、晩年のフーコーの問題関心を明らかにし、パレーシア研究がその関心に対していかなる意味で答えとなりうるのかを示すことにある。そのために、まず、最晩年の論文「啓蒙とは何か」⁴⁾を検討し、フーコーの問題設定を明らかにする。先取りすると、それは「哲学はいかに現実と関わるか」、「いかにして今とは別の仕方でありえるか」、この二つである。次に、パレーシア研究こそ、先の二つの問いに対するフーコーの回答であるという目論みのもとで、フーコーの提示したパレーシアの四つの形式を検討する。パレーシアと一口に言っても状況によってさまざまな様態があるので、その多面性をフーコーの分類に従って整理した上で、フーコーがそこから何を引き出そうとしたのかを示したい。

なお、あらかじめ断っておくと、パレーシア概念は、単に晩年の講義録の読解という、文献学的フーコー研究の点からのみ重要であるわけではない。パレーシアが主題化された1984年講義は、フーコーがまさに自分の「哲学的遺書」として展開した思索、すなわち彼の哲学的到達点と見ることができ⁵⁾。したがって、本稿のように、フーコーがパレーシア概念に見ようとしたものを解明することは、「哲学とは何か」という問いへのフーコー自身の回答、つまりフーコーの「哲学」そのものを理解するために不可欠の作業でもある。

一. フーコーとカント 批判をめぐって

パレーシアをめぐる具体的な議論に進む前に、晩年のフーコーの問題意識を確認しておこう。パレーシアについて語るフーコーが、絶えず言及する哲学者が一人いる。それはカントである。フーコーがカントの啓蒙論に関心を寄せていたことは1984年に出版された論文「啓蒙とは何か」によって知られているが、パレーシアをめぐる講義においても、それが意識されていたことは明白である⁶⁾。1983年最初の講義はカントの啓蒙論文に関するものであったし、以降の講義中もたびたびカントの名前に言及される。フーコーはパレーシアについて語り始めるに際して、カントの啓蒙論に触れざるを得なかった。しかし、パレーシアとカントがいったいいかなる点で結びつくのか。その晩年の問題意識を明らかにするためにも、フーコーの「啓蒙とは何か」を参照しなければならない。

この論文でフーコーは、カントの同題論文にコメントを付しつつ、自らの仕事を批判哲学の流れの中に位置づける。まず、カントの啓蒙論文についてフーコーが強調するのは次の二点である⁷⁾。第一に、啓蒙と批判の不可分性である。フーコーの説明によれば、カントは啓蒙を「人類が、いかなる権威にも服従することなく、自身の理性を使用しようとする時」だとする（QL, p. 567/10頁）。だからこそ啓蒙は批判を必要とするとフーコーは論じる。なぜなら、カントにとって批判とは、理性の使用が正当でありうる条件を決定するものだからである。理性を使用する時こそ、理性の使用範囲が吟味されねばならない。啓蒙は、理性使用の時代であると同時に、批判の時代でもある。このようにしてフーコーは、啓蒙と批判の結びつきを強調する。第二に、カントの啓蒙論文と歴史哲学に関する諸論文との関連も強調される。歴史哲学諸論文でカントは人類全体の進歩について論じている。「啓蒙とは何か」でも啓蒙を人類の未成年状態からの脱出と捉え人類を問題にしつつ、各人が啓蒙のプロセスに関わることに重点が置かれている。

この二点をふまえて、フーコーはカントの啓蒙論文が、批判的考察と歴史についての考察とを結びつける役割を果たすと論じる。すなわち、この論文においてカント自身が、啓蒙という現在の視点から、自分の仕事を見直している点を鋭く指摘する。哲学者が、自分の仕事（批判哲学および歴史哲学）と自分がものを書いている特定の時についての分析（未成年状態の脱出としての啓蒙の時代、つまりカントにとっての現代）とを結びつけたのは哲学史上初めてのことであり、この点にこそカント啓蒙論の意義があるとフーコーは言う（QL, p. 568/11頁⁸⁾）。そしてこのカントの論文の中に、フーコーは自身のキーワードでもある「現代性の態度 (attitude de modernité)」を見いだす（QL, pp. 568-70/14-6頁）。ここで言われる態度とは、現実 (actualité) に対する関わり方のことであり、エートスと言い換えられる。カントが啓蒙論文で示したのは、まさに哲学者としての自己と啓蒙という時代を結びつ

フーコーのパレーシア

ける態度である。

では、この哲学者としての態度は、現代においては、どのような形をとるのか。フーコーは、二十世紀の哲学・哲学者が現実に対してとるべき態度、つまり現代の哲学的エートスを次の四点から特徴づける（QL, pp. 571-5/16-21 頁）。

（一）啓蒙の合理性に対する二者択一の拒絶：啓蒙の理性主義に全面賛成か、全面否定かという選択をすべきではない。

（二）啓蒙と人間主義の区別：人間主義はそれが依拠する人間観を色づけ、その人間観を正当化しようとする。これに対して啓蒙とは、特定の人間観のような他の権威に依拠せず絶えず自らを作り出す態度であって、両者は同一視できない。

（三）限界の態度：批判が明らかにする限界に自覚的である点では、カントとフーコーは共通する。とはいえ、カントの批判が人間の認識の限界を見定める消極的試みであったのに対して、フーコーは批判に積極的な意味を与える。現代の批判とは、我々が普遍的、必然的、義務的と考えているものの中で、偶然や恣意的な束縛が占める部分は何れかを見極めることである。つまり、カントの批判が我々にとっての必然的な限界を明らかにするものであったのに対して、フーコーが問題にする現代的な批判とは、「必然性」として与えられているものの中で、我々が乗り越えられるものは何かを問う積極的な意味を持つ。

（四）実験の態度：自らの批判を普遍的なものともみなさず、批判がつねにやり直される可能性を含むという自覚が必要である。

このような哲学的エートスは、具体的には現在のあり方についての歴史調査を通じて実践される。この歴史調査は、考え、語り、行為する主体としての我々を構成することになった出来事を対象として行われる。この歴史調査をフーコーは「目的において系譜学的、方法において考古学的」という独自の用語で特徴づける（QL, p. 574/20 頁）。系譜学的というのは、我々の現在のあり方が偶然から生じており必然的なものではなく、それゆえに別の仕方でありえることを明らかにする目的のもとに歴史調査が行われることを意味している。一方、考古学的とは、言説を、一つ一つ出来事として取り出し分析する歴史調査の手法を意味している。考古学は、超越論的に言説の普遍的な構造を取り出そうとするのではなく、ある言説が成立するための歴史的な条件を見定めるものである。フーコーは、この「目的において系譜学的、方法において考古学的」な歴史調査をまとめて、70年代以降系譜学と呼び、自身の批判哲学の方法としてきた⁹⁾。

カントが啓蒙論文で哲学者として自身の仕事と啓蒙という現実とを関係づけて見せたように、フーコーもこの論文で自身の哲学と現実との関係を示そうとする。すなわち哲学者としてのフーコーは、系譜学によって、現在のあり方を乗り越える可能性を示す積極的な批判を行い、現実と関わる。

この現代的な批判のあり方をふまえれば、晩年のフーコーの問題として次の二点を取り出

することができるだろう。それは「哲学はいかに現実と関わるか」と「いかにして今とは別の仕方でありえるか」である。この問題に一つの回答を与えるのがパレーシアだと筆者は考える。そこで以下では、パレーシアがいかなる意味で回答となるのかを見ていくことにする。

二. パレーシアを構成する基本的要素

まず、パレーシアという語の意味を確認しておこう。パレーシア *parrésia* は、「すべて」を意味する *pan* と「言われたこと」を意味する *rêma* という二つの語から作られており、「すべてを言うこと」という意味で使われた。言う主体のことは、パレーシアステース *parrésiastês*¹⁰⁾ と呼ばれる。これらの語は紀元前五世紀から後五世紀に至るまで、ギリシア、ローマ、初期のキリスト教の時代を通じて使われ続けた。フーコーは、二年間の講義を通じて主に古代ギリシアにおけるパレーシアを扱い、次年度に初期キリスト教におけるパレーシアを取り上げると予告して84年の最終講義を終えている。

パレーシアは、日本語に定訳はなく、「つつみ隠さず率直に話す」や「自由にものを言う」など文脈に応じて様々に訳される。一方、フランス語では「全部言うこと (*tout dire*)」や「率直に話すこと (*franc parler*)」と訳される。また、対立語として「おべっか (*flatterie*)」や「弁論術 (*rhétorique*)」が挙げられる。

フーコーは、包み隠さず話すということは、本当のことを話すということであり、真理を語ることであったといった具合に元の意味を拡張し、パレーシアを言い換えて、「真言 (*véridiction, dire-vrai*)」という語を用いる¹¹⁾。しかし、誰がどのように真理を言うのだろうか。フーコーは、パレーシアの意味内容を一義的に確定することは難しいと認めつつ、それを構成する基本的要素として次の三点を強調する (GSA, pp. 60-4, CV, p. 12)。

第一点は、繰り返しになるが「真理」を言うことである。ただし、ここでいう真理が、明晰判明な事柄という意味での真理とは異なる点に注意しなければならない。というのも、フーコーは、真理に到達するための条件が古代と近代以降ではまったく異なると強調するからである。フーコーによれば、古代には、ありのままの主体にとどまっていたら真理を得ることはできないと考えられた。つまり、真理に到達するためには、主体自身の変容する必要があった。これに対して、近代以降は、主体が、自身に変容も修正も加えることなしに、ありのまま真実を認識できると考えられるようになった。フーコーはこの転換点を「デカルト的契機」と呼ぶ (HS, pp. 15-20/18-23 頁)。後述するように、フーコーの取り上げるパレーシアとは、この真理認識についての近代以降の見方を転回するものであり、そこでは、主体が「勇気」を備えていることが語りの真を保証する。

しかし、単に真理を言うだけではパレーシアにはならない。例えば、数学の論証を行っても、それはパレーシアではない。パレーシアを構成する二つ目の要素は、真理を言うことに

フーコーのパレーシア

何らかの「危険」が伴うことである。この危険とは、暴力の可能性を意味し、最悪の場合は発言者の死さえ含む。例えば、君主に真理を進言する臣下は、君主の怒りをかい死を命じられる危険をおかしてパレーシアを実践する。「率直に言う」ことは、危険を顧みずに率直に話すという要素を含んでいる。

三つ目の要素は、危険を顧みずに真理を言う「勇気」である。ただし、パレーシアが現実の効果を持つためには、真理を語る側だけでなく、真理を聞く側の勇気も必要である点に留意しておこう。パレーシアストが語る真理は、聞く側にとって決して快いものではなく、だからこそ、怒りや暴力すら引き起こしうる。そのような真理を受け入れるためには聞く側の勇気が必要である。

まとめると、パレーシアとは、「勇気」を持った人が「危険」を顧みずに「真理」を言うことである。ただし、パレーシアの内容は、キュニコス派が問題になる1984年講義後半になると、言うという行為にとどまらなくなる。というのも、後で見ると、キュニコス派のパレーシアとは、語りではなく生き方によって真理を示すところに主眼があるからである。したがって、フーコーはパレーシアに、真理を言う行為だけではなく、真理を示すような生のあり方というより広い内容を与えている。

以下では、フーコーが取り上げている四つのパレーシアの形態を順に見ていく。あらかじめ概観しておくと、それらは民主政下のパレーシア、君主政下のパレーシア、ソクラテスのパレーシア、キュニコス派のパレーシア (*parrésia démocratique / autocratique / socratique / cynique*) である。前二者は政治に関わる真言であるので政治的パレーシアと呼ばれ、後二者は生き方に関わるので倫理的=エトスのパレーシア (*parrésia politique / éthique*) と呼ばれる。

三. 政治的パレーシア

三. 一. 民主政下のパレーシア

パレーシアは、古代においては、民主政を構成する基本的要素の一つであった。諸説ある中で、フーコーは、民主政の構成要素としてパレーシアの他に次の三つを挙げる (GSA, pp. 138-9)。すなわち、(一) エレウテリア (*eleutheria*) : ポリスが他の国家から支配されず自由であり、またポリス内において市民は自由である。(二) イソノミア (*isonomia*) : 市民が法の前で平等である。(三) イセーゴリア (*isêgoria*) : 市民は発言する権利を平等に持つ。これに加えて、(四) パレーシアは、民会、つまりそこに参加している市民全員に対して、真理を語る・率直な発言を行う自由のことである。市民にとって望ましくない真理を語れば、追放刑や死刑を言い渡される恐れがある。この危険をおかすゆえに、市民に対して発言することはパレーシアになるのである。

パレーシアは、この四つの中で民主政にとってとりわけ重要な意味を持つ。フーコーは、「民主政があるためにはパレーシアがなければならず、パレーシアがあるためには民主政がなければならない」と言い、民主政下のパレーシアの重要性を強調する（GSA, p. 143）。その重要性が具体的に示されており、フーコーが詳細な分析を加えるテキストが、エウリピデスの「イオン」である。主人公イオンは、パレーシアがなければ奴隷の身分と同じだと言い、発言の自由を強く欲する¹²⁾。なぜなら、パレーシアは、市民の中でも能力を持ち政治に参加する者だけに關わる自由であり、国政に携わるために必要だからである。

ここに、イセーゴリアとパレーシアの違いがある。両者はともに発言に關わるが、前者がすべての市民に平等に与えられる発言の権利であるのに対して、後者は能力を持つ者、危険をおかす勇気を備えた者だけが行使できる発言の自由である。パレーシアは、平等というポリスの原理に対して、差異を持ち込む。逆に言えば、差異がパレーシアの行使を可能ならしめ、民主政への貢献を可能にする。エレウテリア、イソノミア、イセーゴリアがあれば民主政は成り立つが、パレーシアなくしてよき民主政は不可能である。

しかし、やがて、パレーシアと民主政のよき関係が狂うことになる。フーコーによれば、民主政とパレーシアは次の二点においてなじまない可能性がある（GSA, pp. 164-8, CV, pp. 34-40）。第一に、パレーシアはポリスにとって危険である。パレーシアは、上で見たように、そもそもは卓越した者が行う発言であり、差異化の実践であった。しかし、民主政が衆愚政治に陥るにつれて、発言者の卓越性という契機は失われていき、誰もが好き勝手なことを言う自由へとパレーシアの意味が変質する。結果として、ポリスにとって有害な発言が増大するので、パレーシアはポリスにとって危険になる。第二に、パレーシアは発言者自身にとって危険である。なぜなら、市民の気に入らない真理を語ることは、人々の反感を買い、追放刑や死刑に処せられる危険があるからである。この危険を恐れる人々は、真理を言うことをやめて多数派におべっかを使うようになる。ポリスに有害な発言や単なるおべっかではない「悪しきパレーシア (*mauvaise parrésia*)」は、真理の勇気という契機を欠いており、単なる私的な利益からなされる発言にすぎない（GSA, p. 155）。こうして、民主政において本来のパレーシアを行使することが困難になっていく。

民主政に内在する平等であるイソノミア、イセーゴリアと、よき民主政を成り立たせるゆえに差異を持ち込むパレーシアは、そもそも原理的な緊張関係を孕んでいる。パレーシアがもたらす差異は、民主政の平等な構造と齟齬を来すことになる。政体としての民主政は真言を消滅させる傾向を持ちうるのである。

三. 二. 君主政下のパレーシア

民主政下のパレーシアが困難になった後、新たなパレーシアの場としてクローズアップされるのが、専制君主と助言者の関係である。君主政下のパレーシアとは、君主に対して、哲

フーコーのパレーシア

学者が助言者として真理を言うことである。民主政においてパレーシアがその構成要素であったのに対して、君主政はそもそもパレーシアとはなじまない統治形態である。なぜなら、君主は権力者であり、生殺与奪の権利を握る存在だからである。命の危険を恐れる廷臣達は君主に対して沈黙するかおべっかを使うかしかない。しかし、市民に対して真理を言うのではなく、君主一人にさえ真理を言えばよいと言うこともできよう。そこで、助言の対象として君主の魂という問題が現れる。君主政において統治は君主次第であり、パレーシアを望ましくまた可能にもするのにも君主の魂次第だからである。

フーコーが君主政下のパレーシアの典型例として挙げるのは、プラトンと専制君主ディオニュシオス二世の関係である。この場合、プラトンはパレーシアの結果君主の魂を変えることに失敗し怒りをかうわけだが、だからこそプラトンがパレーシアストとして示した勇気が際立つと言えよう。

プラトンが危険を承知の上でシラクサ行きを承諾したこと、そして君主に助言したことは、彼への愛情や親切心からではない。それは「哲学の努め (*ergon philosophique*)」から、哲学者の責務からである (GSA, pp. 207-10)¹³。哲学は単なる言葉 (*logos*) ではなく、努めでもあらねばならない。すなわち、哲学者は、真言することによって現実の効果を発揮しなければならない。このことをフーコーは「哲学の現実 (*le réel de la philosophie*)」と呼ぶ。

「哲学の現実とは、その実践である。より正確に言えば、哲学の現実とは……言葉 (*logos*) の実践としての哲学の実践ではない。つまり、それは演説としての哲学の実践や対話としての哲学の実践ではない。それは複数形の諸実践としての哲学の実践であり、諸実践、諸実行における哲学の実践である。」 (GSA, pp. 223-4)

哲学者は、パレーシアという実践を通して、哲学を、単なる言葉ではなく実際の効果を持った現実にしなければならない。これが哲学の努めである。しかし、単に語るだけでは効果は得られない。哲学の言葉が現実を持つためには、その言葉を引き受けうる者に語りかける必要がある (GSA, pp. 212-24)。ここで、パレーシアの基本的要素として、勇気が挙げられていたことを思い出そう。パレーシアが現実の効果を持つためには二つの勇気が必要である。一つはパレーシアを実践する主体の危険を顧みない勇気、もう一つは真理を聞く側の不快な真理を聞く勇気である。哲学者は、この勇気を持った者に語りかける実践を通じて、哲学の現実を獲得することができる。

四. 倫理的=エートス的パレーシア

四. 一. ソクラテスのパレーシア

ここまで政治的パレーシアを概観したが、哲学と現実の関わりが政治の領域だけに限られるわけではない。政治との関わりを拒否することから生まれる哲学の現実はず、ソクラテ

スのパレーシアに見ることができる。ソクラテスは、民会ではなく市民に個別に語りかけ、無知を知らしめ、結果として怒りをかかった。相手の怒りをかう危険を顧みず、自身が真と信じることを語った点でソクラテスはパレーシアストである。

フーコーが提起するのは、人々の憎しみをかって死刑に処せられるほどに真言を実行してきたソクラテスが、なぜ政治の場ではパレーシアを実践しなかったのかという問いである。ソクラテスには、政治的パレーシアを拒否する姿勢が見られるが、それはなぜか。フーコーはこの問いに、ソクラテスのパレーシアのあり方、内容を吟味することで答えようとする(CV, pp. 67-86)。

ソクラテスの弁によれば¹⁴⁾、彼が政治的パレーシアを行わなかったのは、それを差し止めるダイモンの合図があったからである。ダイモンがソクラテスに政治的パレーシアを行わせない理由は、政治的パレーシアを実践すれば、身に危険が及び、結局ポリスにとってもソクラテス自身にとっても利益にならないからだという。ここには、先に見た民主政下のパレーシアの困難がはっきりと意識されている。

注意すべきは、ソクラテスが単に死を恐れているのではなく、死ぬことでポリスおよび自身にとって有用でなくなることを恐れている点である。有用であることは、政治的パレーシアを妨げるダイモンが望んでいる使命でもある。この使命とは具体的には、人々が自己自身、つまり自身の思慮、真実、魂の世話をしよう見張ることである¹⁵⁾。ソクラテスは、人々に自己の世話、つまり自己への配慮を行うよう導くことを使命としており、そのためにパレーシアを行う。ここにフーコーは、政治的パレーシアとは別の形のパレーシアの登場を見る。「この〔政治的パレーシアとは〕別の目的とは、実際、人々が自らを世話するように、つまり、各人が、真理との間に魂の存在自体に基づいた関係を持つような理性的な存在として、自己を世話するようにさせることである。今ここにこそ、倫理の軸に立つパレーシアがある。魂の存在自体との関係において理にかなった行動と見なされるような、行動の原理としてのエートスの基礎付け。これがこのパレーシアの新たな形態において問題になっていることである。」(CV, pp. 79-80.)

ソクラテスが行うのは、個々人に対して、無知を暴き、自己を真に配慮させるパレーシアである。これは、主体のあり方・存在に関わるゆえに、倫理的=エートス的パレーシアと呼ばれる。

フーコーは「倫理 (éthique)」に通常の用法とは異なる意味を与えているので、ここで意味を明確にしておこう。フーコーは『快樂の使用』導入部¹⁶⁾において、道徳 (morale) と倫理との違いに言及している。フーコーによれば、道徳には、(一)「様々な指令的装置を通じて個人あるいは集団の行為に課される、行為の価値や規則の総体」という意味での道徳的コード、(二) そのコードにしたがった行動、(三) 人が自分自身を、行為の道徳的コードの中の指令的要素に依拠しつつ行動する道徳的主体として構成するその仕方という三つの意味

フーコーのパレーシア

がある。この中で、倫理に関わるのは第三の意味である。

ある人が、コードにかなうという意味で道徳的に行動する場合も、その行動の内実やそれを持つ意味は様々でありうる。倫理を論じるフーコーの着眼点は、行動が道徳的コードに一致している点ではなく、行為者が、そのような振る舞いによって、自身をどのような主体として練り上げあげるのかという点にある。倫理と言われる時に問題になるのは、主体のあり方、つまりエートスである。*parrésia éthique*と言われるときの *éthique* も、この意味である。強調点は、真言する主体のあり方と、伝えられる真理が真言を聞く主体のあり方に関わる点にある。

四. 二. キュニコス派のパレーシア

ソクラテスとは別の形で、倫理的=エートス的パレーシアを実践したとしてフーコーが取り上げるのが、キュニコス派である。フーコー自身も認めているように、キュニコス派は哲学のメインストリームから外れた存在であった。それをあえて取り上げるのは、キュニコス派が真理を示す実践と密接に結びついた学派だからである。フーコーによれば、キュニコス派は、同時代人からパレーシアの人々と見なされていた。また、キュニコス派の祖ディオゲネスの著名なエピソードも思い出そう。「世の中で最もすばらしい事柄は何か」と問われたディオゲネスは、「パレーシアだ」と答えたという¹⁷⁾。

先に見た三つのパレーシアは、真理を「言う」ことがその核となっていた。しかし、フーコーがキュニコス派に見ようとするのは、それとは異なるパレーシアの形である。

「キュニコス派は、本質的に、パレーシア、つまり真言の特定の形態として示される。ただし、その示され方、示される場所、現れる地点とは、生存の表明という形態で、真を表明すべき者、または真言すべき者の生の中に見いだされる。」(CV, p. 200)

フーコーは、発言によって真理を示す語りとしてのパレーシアから、生によって真理を示す生のあり方としてのパレーシアへと、パレーシア概念を拡張している。ここで、パレーシアという語のもとに、真理と生・生き方が結びつく。政治的パレーシアについては哲学は単なる言葉であるだけでなく現実を持たねばならないと論じられていたが、キュニコス派に関しては、哲学が実際の生という現実でもあることが強調される。

ここからはキュニコス派についての分析の内容を見ていこう。フーコーは、キュニコス派に、「凡庸でありながらスキャンダラス」という一見矛盾する特徴を見ている (CV, pp. 213-4)。凡庸というのは、キュニコス派が、同時代の諸哲学派に共有されていた根本的な特徴を備えていたことを意味している。その一方で、キュニコス派の中心原理は「貨幣の価値を変える」というものであった (CV, pp. 208-10)。貨幣 (*nomisma*) と慣習・法・規則 (*nomos*) との類縁性をふまえると、貨幣の価値を変えることは、慣習を変えることをも含意していると理解できる。キュニコス派がスキャンダラスと言われるのは、諸学派に共有されていた思

想を極端な形で推し進め、実際に生き、そもそもの思想の価値を変えてしまったことを指している。パレーシアとの関連で言うと、キュニコス派が、古代に共有されていた「真の生」(*aléthês bios*)の価値を変えようとしていることが注目される。

フーコーによれば、古代ギリシアにおいて「真」には次の四つの意味があった(CV, pp. 201-8)。(一) 隠されていない、偽りががないこと：すべてを完全に見ることができ、どんな部分も隠されてはいる。(二) 混じりけがないこと：本来の姿に何も付け加わっていない、何にも依存することなしにすでに自己充足している。(三) まっすぐであること：公正さに合致しており、またなすべきことに合致している。(四) 不変であること：つねに同一であり、変化や腐敗とは無縁である。

この四つの真の特徴は、命題だけでなく、他の様々なものに適用できる。例えば、これら四つの特徴を備えた愛は「真の愛」であり、これらを備えた生き方は「真の生」である。真の生は普通称揚されるものであるが、キュニコス派はむしろそれを否定する。すなわち、キュニコス派は、真の生には還元できない「別の生 (*vie autre*)」を求めて、「真の生」の四側面を次の仕方で転倒させる(CV, p. 226)。

まず、「隠されていない生」について(CV, pp. 233-5)。隠されていないということは、逆に言えば、隠すべき事柄、恥すべき行いの不在を意味する。キュニコス派は、この特徴を突き詰め、実は隠されている生の現実性、日常性を露にすることで人々の心を戸惑わせる。例えば、本性として与えられたものに隠すべき事柄がないとすれば、マスターベーションも隠す必要はないはずである。それを実践したディオゲネスは、人々の心をかき乱し、流布する「隠されていない生」に含まれる欺瞞性を示したのである。

次に「混じりけのない生」について(CV, pp. 235-40)。混じりけのない生は、他に依存していない純粹な生であり、また自己充足する生でもある。これは物質的な豊かさを追求しない、「真の生とは貧しい生である」というテーマと結びつく。ただし、ここでの問題は、富に対する禁欲的な態度、無関心であって、実際に貧しい生活を送るかどうかは重視されない。というより、古代には「優れた裕福な者」と「教育もなく貧しい者」という対立もあり、優れた哲学者が現実に貧しい生活を送るとは考えられなかった。これに対して、キュニコス派は実際に物質的に貧しい生活を送っていた。貧しい生を送ることは、物質的要素を除いた自己の存在を精査することでもある。「キュニコス派の貧しさは、自己精査する実際の貧しさであり、自己へ際限なく専心する際限のない貧しさである。」(CV, p. 238) この精査の作業が充足することはない。

三つ目に、「まっすぐな生」すなわち本性、理性、慣習に合致した生について(CV, pp. 242-5)。キュニコス派は、本性を追求し、人間の持つ動物性を全面に出す。これは、理性および慣習の拒否でもある。例えば、ディオゲネスは慣習に反して生肉を食べようとしている。自然に合致する生と「まっすぐな生」が対立する瞬間である。

フーコーのパレーシア

最後に、「不変の生」について (CV, pp. 247-51)。これは「至高の生」とも言い換えられ、自己を支配し享受すると同時に、他者に恩恵をもたらす生として考えられていた。恩恵というのは、自己を完全に支配し、その有様を他者に目撃させることによって、他者を導き模範を与えるという意味での恩恵である。キュニコス派も、自己の欲望や情念に対峙するが、それだけではなく、習慣や制度にも戦いを挑む。キュニコス派は、個人的な悪徳だけでなく人間全体が共有する悪徳と向かい合う。これは「自己に対する自己のための戦い」であり、「他者に対する他者のための戦い」となる「戦闘的生」なのである (CV, p. 261)。

キュニコス派は、「真の生」の四つの要素を共有する点では、先に述べたように「凡庸」である。しかし、この要素を極限まで突き詰めることによって、「真の生」の価値を転倒させており、この点で「スキャンダラス」なのである。

キュニコス派のパレーシアとソクラテスのパレーシアは、主体のあり方が問題になるゆえに、ともに倫理的=エートス的パレーシアと呼ばれる。しかし、ソクラテスのパレーシアが魂のあり方に、一方のキュニコス派のパレーシアが実際の生き方に関わるという点で両者は異なる。また、真理をどう考えるかという点でも両者は異なる。すなわち、ソクラテスのパレーシアにおける真理が、魂がよく正しくあるように配慮をすすめることであるのに対して、キュニコス派は当然視されているよい生き方、正しい生き方、つまりは真の生に疑義を呈すことこそ真理を示すことだと考えている。

キュニコス派が行っているのは、流布している「真の生」とは別の生の追求である。彼らは、批判との関連でフーコーがたてた問い「いかにして今とは別の仕方でありえるか」を実践していたと言えよう。この実践によって、彼らは「真」が絶対的なものでも必然的なものでもないことを示している。一方、フーコーも系譜学を通じて現在のあり方が歴史的に作られたものであるにすぎないことを暴露する作業を彼の人生を通じて行ってきた。フーコーの批判とキュニコス派のパレーシアは、当然とされているあり方・考え方の自明性を転倒しようと試みる点で通底している。フーコーによれば、キュニコス派は「哲学的生 (*bios philosophikos*)」という哲学の中心的問題を喚起している。「哲学は哲学的生存と不可分であり、哲学的実践は常に多かれ少なかれ一種の生の実行であらねばならない」とフーコーは言う (CV, p. 216)。キュニコス派は現実の生として哲学をまさに実行していたのである。フーコーは、現代的な批判の一つの類型をキュニコス派のパレーシアに見いだしていたと言えるだろう。

五. 結語

本論文では、フーコーの晩年の問題意識を明らかにするとともに、その意識を背景としたパレーシアをめぐる思索を概観してきた。フーコーの取り上げた様々なパレーシアは、「勇

気」という契機を軸にして、次のように捉え直すことができる。政治的パレーシアに共通するのは、民会や君主にあえて異なる意見を言う勇氣である。次に、ソクラテスの勇氣がある。ソクラテスは、人々に語らせ、彼らの無知を認めさせる。これは、人々の怒りをかう実践であるが、この危険をおかして人々を自己への配慮に導くのがソクラテスの勇氣である。最後にキュニコス派の勇氣は、人々にののしられ軽蔑される危険をかえりみず、今とは違う別の生き方を探求する勇氣である。

フーコーは「哲学はいかに現実と関わるか」および「いかにして今とは別の仕方でありえるか」という問いを立て、その答えをパレーシアの中に見ようとした。第一の問いに対しては、ギリシャにおけるパレーシアを通時的に眺めることから「勇氣を發揮し危険をおかして真理を示す実践を通じて哲学の現実を獲得すること」という答えが得られた。そして第二の問いに対しては、真の生とは別の生を生きようとするキュニコス派の実践がその実例を示すものとなっていた。「啓蒙とは何か」においてフーコーは、現在のあり方を乗り越える可能性を示す積極的な批判を提案していたが、キュニコス派の営みはまさにこの意味での批判であり、現代的な批判をはるか古代に先取りするものであった。この古くて新しい批判のあり方こそ、フーコーがキュニコス派のパレーシアの検討を通じて見いだそうとしたものであろう。

真理を示すことによって現実性を獲得することが哲学の努めだとフーコーは考えた。パレーシアの事例は古代のものだが、哲学が「真理を示す」と現実の関わり的重要性が今日失われてしまったわけではない。「現在もプラトンの時代と同様に、批判的分析という名にせよ、法権利概念についての哲学という名にせよ、主権についての哲学という名にせよ、哲学がその現実性を証明するためには、政治的活動に対して真理を言うことができなければならない」とフーコーは言う（GSA, p. 266）。真理を示す哲学の役割は現在も変わっていない。フーコーの系譜学による批判も、別の「真理」の可能性を示すという意味でパレーシアの実践である。古代ギリシアにおける様々なパレーシアの実践を取り上げることは、フーコーにとって、批判を通じて現実と対峙する哲学者としての生き方を自ら示すことでもあったと言えるだろう。

注

- 1) この言葉に初めて言及されたのは、1982年3月10日の講義（「主体の解釈学」）だが、翌1983年、1984年の講義で中心テーマとして取り上げられる。1981-2年度の講義録は Foucault (Michel), *L'Herméneutique du sujet — Cours au Collège de France. 1981-1982*, Gallimard / Seuil, 2001. 邦訳：『主体の解釈学』、廣瀬浩司・原和之訳、筑摩書房、2004年。以下、参照する際はHSと略記する。また、すべての引用は拙訳だが、邦訳がある場合は、原典のページ数の後に邦訳のページ数を付す。
- 2) Foucault (Michel), *Le Gouvernement de soi et des autres — Cours au Collège de France. 1982-*

フーコーのパレーシア

1983, Gallimard / Seuil, 2008. および Foucault (Michel), *Le Courage de la vérité, le gouvernement de soi et des autres II — Cours au Collège de France*. 1984, Gallimard / Seuil, 2009. 以下、参照する際は GSA および CV と略記する。また、1983 年秋にカリフォルニア大学バークレー校で行われた講義「真理と言説」は、1983 年のコレージュ・ド・フランス講義をなぞると同時に、1984 年の同講義の内容を先取りしている。Foucault (Michel), *Fearless speech*, Semiotext(e), 2001. 邦訳：『真理とディスクール』, 中山元訳, 筑摩書房, 2002 年。

- 3) フーコーのパレーシアについての思索は、すでに国内でも部分的には紹介されてきた。穂藻充「フーコーとパレーシア」(『同志社大学文化学年報』, 2000 年, 188-223 頁) は、講義録刊行以前であるにも関わらず、詳細な GSA の要約となっている。神崎繁『フーコー 他のように考え、そして生きるために』(NHK 出版, 2006 年) では、最後の著作『快樂の使用』『自己への配慮』との関連をふまえて、パレーシア論が紹介されている。また、中山元『賢者と羊飼い フーコーとパレーシア』はパレーシアの歴史的な展開をたどっている。そして、1983 年、1984 年の講義が出そろった 2009 年には雑誌『現代思想』vol. 37-7. (青土社) でもフーコー特集が組まれている。同特集の廣瀬浩司「真理を語る勇気と経験の諸位相 フーコー「パレーシア」講義の射程」(107-19 頁) は、パレーシアについての思索の意義を探る興味深い論考である。とはいえ、いずれもフーコーの議論の紹介にとどまっており、批判との関係を本格的に検討するものではない。
- 4) Foucault (Michel), “Qu'est-ce que les Lumières”, in *Dits et écrits*, tome IV, Gallimard, 1988, pp. 562-78. 邦訳：「啓蒙とは何か」, 石田英敬訳, 『ミシェル・フーコー思考集成 X』所収。以下、参照する際は QL と略記する。
- 5) Gros (Frédéric), “Situation du cours”, in CV, p. 314 を参照せよ。
- 6) カントへの関心は晩年に限定されるものではなかろう。博士副論文がすでにカントの『人間学』の翻訳および注釈であった事実、『言葉と物』におけるカントに与えられた重要性などをふまえれば、フーコーが自身の哲学を練り上げる際に一貫してカント哲学を意識していたことは明らかであると思われる。
- 7) 『自己と他者の統治』では、啓蒙論文が雑誌という公共のメディアに発表された事実も強調される。というのも、公共性の形成に寄与する雑誌というメディアで、公共性(理性の公的使用)について語っている点で興味深いからである。GSA, pp. 9-10 を参照せよ。
- 8) 『自己と他者の統治』においてフーコーは、カントが現代(同時代)に向けた問いは二つあると論じる。一つは「啓蒙とは何か」であり、もう一つは「革命とは何か」である。GSA, p. 21
- 9) 考古学と系譜学という方法論の変化の分析は稿を改めて行いたい。
- 10) フーコーはフランス語訳としてパレーシアスト (parrésiasite) という語をあてている。
- 11) 神崎繁は、この翻訳語とギリシア語の語源とのずれを指摘しつつも、ハイデガーの「真理」概念のフーコーへの影響を念頭に置いて、「何でも包み隠さず話す」を「真理を語る」と解することは不当ではないと結論する。神崎 (2006), 112-3 頁を参照せよ。
- 12) エウリピデス「イオン」, 松平千秋訳, 『ギリシア悲劇全集』7, 岩波書店, 1991 年所収, 52 頁を参照。
- 13) フーコーは、「第一アルキピアデス」の愛ゆえにアルキピアデスに真言したソクラテスと、ここでのプラトンを対比している。
- 14) 『ソクラテスの弁明』31c~e, 32a, CV, pp. 71-3

- 15) 『ソクラテスの弁明』 29e, CV, p. 79
- 16) Foucault (Michel), *Histoire de la sexualité II, l'Usage des plaisirs*, Gallimard, 1984. 邦訳：『快楽の活用』, 田村俣訳, 新潮社, 1986年. 以下, 参照する際はUPと略記し, ページ表記はtel版による。UP, pp. 36-45を参照せよ。
- 17) デイオゲネス・ラエルティオス 『ギリシア哲学者列伝』(中), 加来彰俊訳, 岩波文庫, 1989年, 167頁